高崎市文化財調査報告書第 447 集

矢中野栗遺跡

－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査－

２０２０

高崎市教育委員会

有限会社毛野考古学研究所

高崎市文化財調査報告書第 447 集

矢中野栗遺跡

－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査－

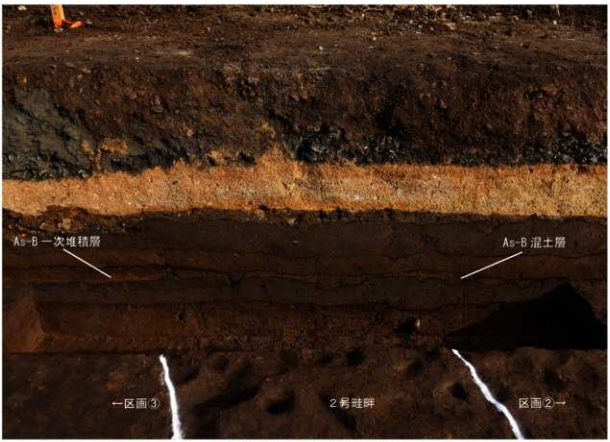
２０２０

高崎市教育委員会

有限会社毛野考古学研究所

口絵写真

調査区全景（上が北東）



２号畦畔断ち割り土層断面（南西から）

例　言

1．本書は、宅地造成に伴う矢中野栗遺跡の発掘調査報告書である。
2．本遺跡は、群馬県高崎市矢中町字野栗 1282 番地、1283 番地に所在している。
3．本発掘調査および整理作業は、土地所有者・高崎市・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導・監督のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
4．発掘調査および整理作業から本書作成に至る費用は、土地所有者に負担して頂いた。
5．発掘調査は、井上　太・春里桃子（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。基準点・遺構測量は石塚伸輝（同毛野）、空中写真撮影は小出拓磨（同毛野）が行った。
6．発掘調査・整理作業は以下の期間で実施した。
【発掘調査】 令和元年 12 月 23 日～令和２年１月 18 日
【整理作業】 令和２年　1 月 20 日～令和２年６月 30 日
7．本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で「784」である。
8．本書の執筆については、Ⅰ章を矢島　浩（高崎市教育委員会）、それ以外の執筆を春里、編集を井上・春里が担当した。遺物写真撮影は井上が行った。
9．発掘調査・整理作業に関わった方々は次のとおりである。
【発掘調査】 新井友己・市川嘉久・岡村美弥子・河崎末雄・中川文雄・根岸　清・馬場陽典・福田敏彦・丸山和幸・山岸重幸
【整理作業】 石川陽子・合田幸子・下條真美代・永島美和子・真下弘美・山口昌子
10．本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
11．発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の諸氏・機関に有益な御指導・御協力を賜った。
記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）
伊藤明宏　大和ハウス工業株式会社群馬支社　株式会社坂本工業　高崎市農業協同組合　有限会社カネコハウス

凡　例

1．図中の北方位記号は座標北を、断面図の水準標高は海抜標高を示す。座標値は世界測地系に基づいている。
2．遺構の略称は、溝跡：ＳＤ、ピット：Ｐとした。また、水田跡は、浅間Ｂ軽石一次堆積層下水田跡をAs-B下水田跡、浅間Ｂ軽石混入土層下水田跡をAs-B混土水田跡と表記した。
3．本書掲載の第１図は高崎市発行１/2,500『高崎市都市計画基本図』、第２図は国土地理院発行１/200,000『宇都宮』・『長野』、第３図は国土地理院発行１/25,000『高崎』を一部引用し、改変した。
4．遺構図の縮尺は、平面図及び土層断面図を縮尺１/40 で表現することを基本として掲載した。各挿図中にはスケールを付してある。
5．遺物写真の縮尺は、１/ １～１/ ２の範囲で掲載した。
6．遺構覆土および土器類の色調観察は『新版　標準土色帖』（農林水産技術会議事務局　財団法人日本色彩研究所監修 2006）に拠った。
7．本文中の数値表記において、（　）は残存値を示す。
8．本書で使用する火山灰指標テフラの略称は以下のとおりである。
As-A: 浅間Ａ軽石（西暦 1783 年）、As-B: 浅間Ｂ軽石（西暦 1108 年）、Hr-FP: 榛名山二ツ岳伊香保テフラ（６世紀中葉）、Hr-FA: 榛名山二ツ岳渋川テフラ　（６世紀初頭）、As-C: 浅間Ｃ軽石（３世紀後葉～末葉）
9．本書作成のために使用した引用・参考文献については、Ⅵ章末に示した。

目　次

口絵写真
例言・凡例
目次・図版目次・写真図版目次
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　地理的・歴史的環境……2
　1　地理的環境……2
　2　歴史的環境……2
Ⅲ　調査の方法と経過……4
　1　調査の方法……4
　2　調査の経過……4
Ⅳ　基本層序……5
Ⅴ　検出された遺構と遺物……7
　1　遺跡の概要……7
　2　水田跡……7
　3　溝跡……9
　4　ピット……10
　5　遺構外出土遺物……10
Ⅵ　まとめ……11
写真図版
報告書抄録・奥付

図版目次

第1図　調査区位置図……1
第2図　遺跡の位置……2
第3図　周辺の遺跡……3
第4図　基本層序……5
第5図　調査区全体図……6
第6図　As-B 下水田跡・As-B 混土水田跡　断面図・エレベーション図……8
第7図　As-B 下水田跡・As-B 混土水田跡　断面図……9
第8図　ＳＤ－１・ＳＤ－２　平面図・断面図…9
第9図　Ｐ－１　平面図・断面図……10
第10図　As-B 一次堆積層残存状況推定図 ……11

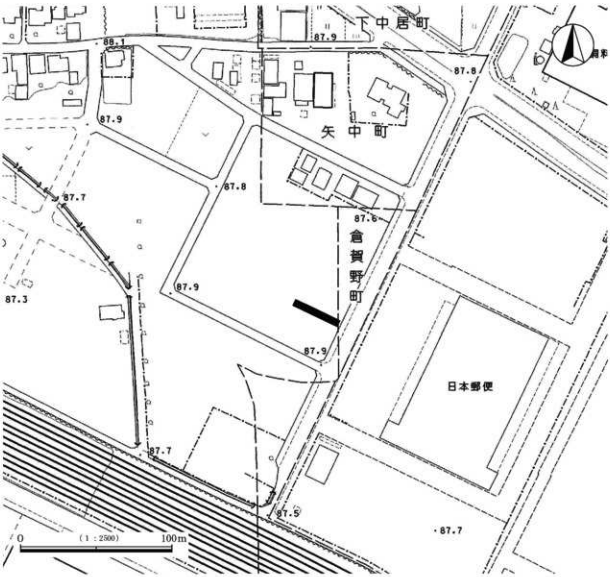
写真図版目次

ＰＬ．１　調査区遠景
　調査区全景
ＰＬ．２　調査区全景
　区画①・区画②検出状況
　区画③検出状況
　区画③・区画④東側検出状況
　区画⑤・区画⑥検出状況
　１号畦畔・５号畦畔全景
　２号畦畔全景
ＰＬ．３　３号畦畔・４号畦畔全景
　３号畦畔全景
　６号畦畔全景
　３号畦畔断ち割り土層断面近景
　ＳＤ－１・ＳＤ－２全景
　Ｐ－１全景
　遺構外出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯

令和元年 10 月、土地所有者から、高崎市矢中町において計画している宅地分譲住宅建設に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課 (以下、市教委と略) にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である倉賀野 39- 1 遺跡内に所在し、下之城遺跡、宮原遺跡に隣接するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年 10 月 7 日には、市教委へ埋蔵文化財試掘 (確認) 調査依頼書が提出され、同年 11 月 19 日に試掘 (確認) 調査を実施した。その結果、平安時代の水田跡と水田に伴う畦畔を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「矢中野栗遺跡」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、令和元年 12 月 3 日に土地所有者と民間調査機関有限会社毛野考古学研究所との間で契約を締結、また同日に土地所有者・有限会社毛野考古学研究所・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。



第 1 図　調査区位置図

Ⅱ　地理的・歴史的環境

1．地理的環境

本遺跡は、高崎市矢中町字野栗に所在し、高崎台地南部の標高約 87.9 m に立地する。高崎台地は、約 2 万 1000 年前に、浅間山噴火に伴う前橋泥流堆積物によって形成された前橋台地のうち、約 1 万 1000 年前に地震を発生原因として堆積したとされる高崎泥流を地形の基盤とする部分を指す。高崎台地の東縁は、井野川低地帯によって前橋台地と区分され、西縁は烏川左岸に至る。高崎台地では、烏川をはじめとする河川が南東流し、これによって形成された微高地や低湿地が河川の流下に沿って帯状に入り組む形となっている。また、本遺跡周辺では長野堰や、そこから分水される矢中堰・地獄堰・倉賀野堰など、現代に至るまで多くの用水系が整備されており、低湿地を中心に水田耕作が広く行われた。

2．歴史的環境

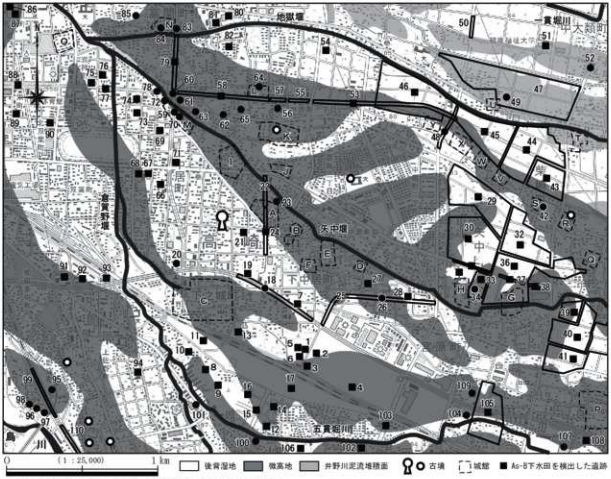
本遺跡が立地する高崎台地では、基盤が形成された約 1 万 1000 年前以降に生活の営みが始まったと言われている。したがって、旧石器時代の遺跡は発見がなく、縄文時代や弥生時代に至っても調査事例は多くはない。その後、本遺跡周辺では、古墳時代前期以降に微高地を中心に墓域や集落域が広がりをみせるようになる。また、低湿地を中心に水田耕作が行われた痕跡が見つかっており、微高地と低湿地が入り組む地形に沿った土地利用が窺える。本節では、本遺跡に関わる奈良・平安時代と中世を中心に概要を記す。

本遺跡周辺の集落域は、河川沿いの微高地を中心に認められる。大規模な集落としては、烏川左岸に位置する下佐野遺跡Ⅰ地区（110）と隣接する下佐野遺跡Ⅱ地区があり、8 世紀末から 11 世紀後半の住居跡が計 200 軒以上検出されている。このほか高関村前Ⅱ・高関東沖・村前遺跡（79）で 8 世紀の住居跡が、宮原町遺跡（2）、下中居条里遺跡（25）、倉賀野中里前遺跡（107）、柴崎・隼人遺跡 3（49）などで 9 世紀の住居跡が検出されている。これらは、水田跡が検出された低湿地に隣接する傾向があり、奈良時代から平安時代にかけて継続的な土地利用を示す事例は少ない。また、条里制水田の開発は 9 世紀以降と想定されていることから（田村 2003）、生産域の拡大に伴って集落の移動があった可能性を示している。

本遺跡周辺の水田耕作は、少なくとも古墳時代から行われており、下中居条里遺跡で As-C 混土下水田跡及び Hr-FA 洪水層下水田の痕跡、東町Ⅲ遺跡（86）で As- C 下水田跡及び Hr-FA・Hr-FP 洪水層下水田の痕

※「下中居天神裏遺跡 3」（矢島・常深 2017）第 2 図を引用・改変。

第 2 図　遺跡の位置



※「下中切天神奥遺跡３」（矢島・常深 2017）第３図を引用・加筆。
※地形分類は、「群馬県史」通史編１の付図２「群馬県内主要地域の地形分類図」（群馬県史編さん委員会 1990）を引用・改変。

1	矢中野原遺跡	28	矢中村西Ⅰ遺跡	55	中居町一丁目遺跡	82	岡久保遺跡	109	倉賀野下天神遺跡
2	宮原町遺跡	29	矢中天王前遺跡	56	中居町一丁目遺跡２	83	高間原村遺跡	110	下佐野遺跡Ⅰ地区
3	宮原町遺跡２	30	矢中村北Ａ・天王前遺跡	57	中居町一丁目遺跡３	84	高間・堀村遺跡２	A	下中居新井屋敷
4	宮原町遺跡３	31	矢中宝島寺裏遺跡	58	上中居遺跡群	85	高間高根遺跡	B	高尾屋敷
5	下之城村東遺跡	32	柴崎前遺跡	59	上中居辻薬師遺跡３	86	東町Ⅱ遺跡	C	和田下之城
6	下之城村東遺跡Ⅱ	33	矢中村北Ｂ遺跡	60	上中居辻薬師Ⅱ遺跡	87	東町遺跡	D	道場屋敷
7	下之城・村東遺跡３	34	矢中村北Ｃ遺跡	61	上中居辻薬師遺跡３	88	栄町Ⅱ遺跡	E	下中居佐藤屋敷
8	下之城仲冲遺跡	35	矢中村北Ｄ遺跡	62	上中居辻薬師遺跡４	89	栄町Ⅲ遺跡	F	下中居福田屋敷
9	下之城仲冲Ⅱ遺跡	36	矢中下村北・仲内遺跡	63	上中居辻薬師遺跡５	90	北双葉町遺跡	G	下村北屋敷
10	下之城仲冲遺跡３	37	矢中下村北Ⅱ遺跡	64	上中居岡東遺跡２	91	和田多中遺跡	H	東原・矢中屋敷
11	下之城仲冲遺跡４	38	矢中測ノ内遺跡	65	上中居岡西遺跡２	92	上佐野稲荷遺跡	I	新屋の砦
12	下之城村前遺跡	39	矢中村東遺跡	66	上中居荒神Ⅰ遺跡	93	双葉町Ⅰ遺跡	J・K	宇名里環濠遺構
13	下之城村前Ⅱ遺跡	40	矢中村東Ｂ遺跡	67	上中居荒神Ⅱ遺跡	94	下佐野観音塚遺跡	L	丸茂屋敷
14	下之城村前Ⅲ遺跡	41	矢中村東Ｃ遺跡	68	上中居荒神遺跡３	95	上佐野舟橋Ⅰ遺跡	M	反町城
15	下之城村前Ⅳ遺跡	42	柴崎村間遺跡（２次）	69	上中居西屋敷遺跡	96	上佐野舟橋Ⅱ遺跡	N	高間屋敷
16	下之城村前Ⅴ遺跡	43	柴崎遺跡群（Ⅰ）	70	上中居西屋敷Ⅱ遺跡	97	上佐野舟橋４遺跡	O	岡田屋敷
17	下之城村前遺跡７	44	柴崎遺跡群（Ⅱ）	71	上中居西屋敷Ⅲ遺跡	98	上佐野舟橋遺跡	P	東中里城
18	下之城金里遺跡	45	柴崎遺跡群（Ⅲ）	72	上中居・西屋敷遺跡４	99	舟橋遺跡	Q	大下屋敷
19	下之城村北Ⅱ遺跡	46	柴崎遺跡群（Ⅳ）	73	上中居平塚Ⅰ遺跡	100	倉賀野上新堀Ⅰ遺跡	R	蛍沢屋敷
20	下之城村北遺跡	47	柴崎遺跡群（Ⅴ）	74	上中居平塚遺跡３	101	倉賀野西上正六遺跡	S	村間屋敷
21	上中居鳥栗跡遺跡	48	西浦・吹手西遺跡	75	岩押町Ⅰ遺跡	102	倉賀野条里Ⅱ遺跡	T	大都奉居
22	上中居前屋敷遺跡１～４	49	柴崎・隼人遺跡３	76	岩押町Ⅱ遺跡	103	倉賀野条里Ⅵ遺跡	U	隼人屋敷
23	下中居天神裏遺跡３	50	南大類稲荷遺跡３	77	岩押町Ⅲ遺跡	104	倉賀野上鍛冶遺跡	V	光明寺
24	下中居天神裏遺跡１・２	51	中大類中田遺跡	78	上中居平塚遺跡	105	倉賀野駅北遺跡	W	柴崎桜井屋敷
25	下中居金里遺跡	52	中大類金井遺跡	79	高間村Ⅱ・高間東Ⅲ・村間遺跡	106	倉賀野下新堀遺跡	X	高井屋敷
26	下中居金里遺跡Ⅱ	53	柴咲遺跡,南大類遺跡群	80	高間東冲Ⅱ遺跡	107	倉賀野中里前遺跡	Y	柴崎西浦屋敷
27	下中居金里遺跡Ⅲ	54	南大類柳原冲遺跡	81	高間東冲Ⅲ遺跡	108	倉賀野中里前遺跡２		

第３図　周辺の遺跡

跡が検出されている。その後、奈良・平安時代になると用水路の整備とともに水田開発はさらに拡大したとみられ、倉賀野中里前遺跡２（108）でAs-B下水田跡より古い水路跡や分水遺構が調査されている。また、宮原町遺跡２（３）、宮原町遺跡３（４）、下之城村前遺跡７（17）などで、As-B下水田より古い、条里制

地割に沿う溝跡が検出されており、これに伴う水田跡の存在を示唆している。平安時代末期の水田であるAs-B下水田跡は、河川沿いの低湿地を中心に調査事例が数多く存在する。As-B下水田跡を検出した本遺跡周辺では、本遺跡から100 m以内に位置する宮原町遺跡（2）や、宮原町遺跡２（3）、下之城村東遺跡（5）、下之城村東遺跡Ⅱ（6）で条里制の坪境を示す大畦畔が検出されている。また、倉賀野地域では倉賀野中里前遺跡２（108）、下之城地域では下之城村前遺跡７（17）、上中居地域では上中居荒神Ⅰ遺跡（66）などで大畦畔が検出された。矢中地域では、矢中天王前遺跡（29）や矢中村北Ａ・天王前遺跡（30）で、大畦畔や大型の水溜状遺構などの水利施設が検出されており、条里制地割に基づいた水田耕作が広く行われたことが明らかとなっている。水田跡に関わる遺物は、矢中村東遺跡(39)で大型水溜状遺構に接続する水路から、銅印「物部私印」が出土していることが特筆される。

中世になると、荘園制を基盤に成長してきた武士が台頭し、所領の開発とともに拠点となる城館を築いた。本遺跡周辺では、和田氏の和田下之城（C）や倉賀野氏などの城館が知られている。このほか、発掘調査では、上中居辻薬師遺跡で反町城（M）の一部とみられる堀や郭、矢中下村北・砂内遺跡（36）で中世城館とみられる堀や土塁、掘立柱建物跡群が検出されている。これに対して当該期の集落跡としては、高関村前Ⅱ・高関東沖・村前遺跡（79）で掘立柱建物群や井戸跡が検出され、倉賀野西上正六遺跡（101）でAs-Bを覆土に含む竪穴状遺構が検出されている。生産域は、下中居条里遺跡（25）、下中居条里遺跡Ⅱ（26）、柴崎・隼人遺跡３（49）でAs-B降下以降の水田跡（As-B混土下水田跡）が確認されている。本遺跡周辺では、その後も耕作が行われており、東町Ⅲ遺跡（86）でAs-A下水田跡、 下中居条里遺跡ⅡでAs-A下畠跡が見つかっている。また、下之城村東遺跡、宮原町遺跡など多くの周辺遺跡でAs- A降下後の復旧痕跡が検出されており、災害に見舞われながらも現代に至るまで耕作地として利用された歴史を知ることができる。

Ⅲ　調査の方法と経過

1．調査の方法

試掘調査の結果から、発掘調査では、As-B下水田跡もしくは、As-B混土下水田跡が検出されることが予想された。したがって、重機（0.25㎥バックホー）による表土除去は、As-B一次堆積層の残存状況に留意しつつ、As-B一次堆積層中層～下層までを基準として掘り下げを行った。その後は、ジョレン・移植ゴテ等を使用して、人力でAs-B一次堆積層及びAs-B混土層を除去することで、水田跡を検出した。遺構調査では、必要に応じて半裁で掘削を行い、遺構の埋没状態を確認した。遺構の測量は、平面図はトータルステーションを用い、断面図は手実測で作成した。測量に用いた基準点は、GNSSによる観測で設置し、座標は世界測地系を使用した。遺構写真は、35 mmモノクロネガフィルム・35 mmカラーリバーサルフィルム・デジタル一眼レフカメラCanon EOS（2410万画素）を使用し、遺跡全体はドローン（Mavic 2 Pro）により空中写真撮影を実施した。

整理作業では、遺構図面の修正を行い、第二次原図を作成した。出土遺物は、水洗・注記を行い、接合の可否を確認した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラNikonD850で撮影をした。遺構図トレース、版組はAdobe Illustrator CS 6、写真加工はAdobe Photoshop CS 6を使用した。

2．調査の経過

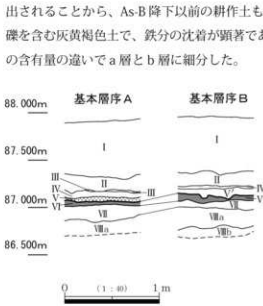
発掘調査は、令和元年12月23日～令和2年1月18日の間に行った。

【令和元年12月】23日：発掘器材及び重機を搬入。重機による表土除去を開始。仮設トイレを設置。24日：同日中に表土除去を完了し、重機を搬出。発掘補助員を動員。安全対策を実施。25日：ＧＰＳ測量により基準点を設置。遺構掘り下げ作業に着手。26日：As-B下・混土水田面検出作業に着手。27日：年末年始の安全対策を確認。

【令和２年１月】６日：As-B下・混土水田面検出作業を再開。８日：雨天のため現場作業を中止。９日：As-B下・混土水田面検出作業を完了。10日：清掃作業を行い、調査区の空撮を実施。As-B下・混土水田面断ち割り調査に着手。14日～15日：現場作業を中止。16日：As-B下・混土水田面断ち割り調査を再開。17日：As-B下・混土水田面断ち割り調査及び遺構掘り下げ作業を完了。高崎市教育委員会による現場の終了確認。発掘器材を撤収。18日：仮設トイレを撤去。

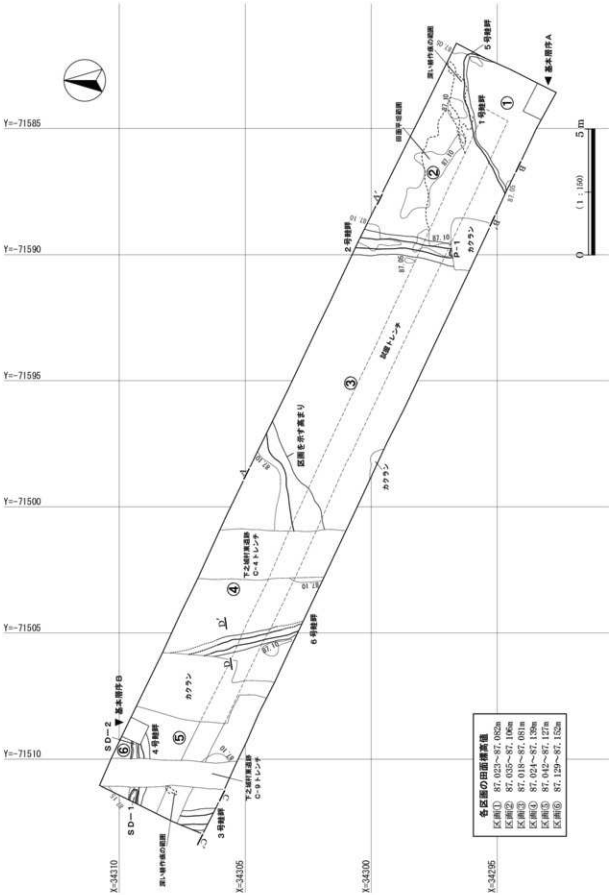
Ⅳ　基本層序

基本層序は、調査区北西端（Ｂ）及び南東端（Ａ）で確認した。地形は、調査区北西から南東へ向かって緩やかに低くなっており、As-B一次堆積層下遺構検出面の標高は、87.018m～87.152mである。Ⅰ層は、造成土及び攪乱土である。Ⅱ層は、As-Aを含む黒褐色土である。Ⅲ層は、混じりのないAs-A軽石層であることから、窪みなどに堆積した一次堆積に近い土であるとみられる。調査区南東端でのみ検出された。Ⅳ層は、As-Bを含む灰黄褐色土で、部分的に鋤き込みとみられる凹凸が確認されるため、As-B降下後の耕作土であると考えられる。Ⅴ層は、As-Bの一次堆積層である。調査区南東側、中央付近、西側の一部において２cm～10cmの厚さで堆積しているが、一部では後世の攪拌により検出されない範囲が存在する。一次堆積の状況は、調査区南東端で最も明瞭であり、４層のユニット構造（上からにぶい黄褐色火山灰層、細粒［φ0.2cm］軽石層、粗粒［φ0.5cm］軽石層、青灰色火山灰層）が確認される。なお、調査区北西側（区画⑤・区画⑥）でみられる、部分的に攪拌の痕跡が認められる堆積土をⅤ′層として純粋な一次堆積層と区別した。Ⅵ層は黒褐色粘質土で、As-B降下以前の水田土壌であると考えられる。Ⅶ層は、礫や砂粒を含む褐灰色粘質土で、鉄分の沈着が顕著であることから、洪水由来の土層であると想定される。奈良・平安時代の土器片が微量検出されることから、As-B降下以前の耕作土もしくはその基盤層となる可能性がある。Ⅷ層は砂粒や拳大の礫を含む灰黄褐色土で、鉄分の沈着が顕著であることから、洪水由来の土層であると考えられる。土色や礫の含有量の違いでａ層とｂ層に細分した。



Ⅰ．表　　土　As-Aφ0.2～0.5cm、As-Bφ0.2～0.5cm、Ⅶ層褐灰色土粘質土等を含む造成土及び攪乱土。
Ⅱ．黒褐色土（10YR3/1）　As-Aφ0.2～0.5cm多量含む。しまりあり。粘性ややあり。
Ⅲ．褐灰色土（10YR6/1）　As-Aφ0.2～0.3cm多量含む。しまり弱。粘性弱。
Ⅳ．灰黄褐色土（10YR2/3）　As-Bφ0.1～0.2cm多量含む。しまりややあり。粘性やや弱。鉄分の沈着がみられる。
Ⅴ．灰黄褐色土（10YR2/5）　As-Bφ0.2～0.5cmを主体とする一次堆積層。しまりやや弱。粘性弱。
Ⅴ′．黒褐色土（10YR3/2）　As-Bφ0.2～0.5cm多量含む。しまり・粘性ややあり。鉄分の沈着がみられる。巻頭所によっては下層に黄褐色粘質土ブロックφ0.5～1.0cmを少量含む。
Ⅵ．黒褐色土（10YR3/1）　白色軽石φ0.2cm微量含む。しまりあり。粘性強。鉄分の沈着がみられる。
Ⅶ．褐灰色土（10YR5/1）　白色軽石φ0.2cm・砂粒少量。礫φ0.5cm・黄褐色砂粒φ0.5cm微量含む。しまりあり。粘性強。鉄分の沈着が顕著である。
Ⅶa．灰黄褐色土（10YR6/2）　礫φ0.5cm中量。礫φ1.0～5.0cm少量。黄褐色砂粒φ0.2～0.5cm微量含む。しまりやややり。粘性強。Ⅶ層よりさらに鉄分の沈着が顕著である。
Ⅶb．褐灰色土（10YR6/1）　砂粒中量。礫φ1.0～10.0cm少量。白色粒子φ0.2cm微量含む。しまりあり。粘性強。鉄分の沈着が顕著である。

第４図　基本層序


Y=-71585
Y=-71590
Y=-71595
Y=-71500
Y=-71505
Y=-71510
X=-34310
X=-34305
X=-34300
X=-34295
0
(1：150)
5m
基本測点A
基本測点B
5号測点
1号測点
2号測点
3号測点
4号測点
6号測点
7-3測点
7-4測点
SD-1
SD-2
カクラン
試掘トレンチ
C-4トレンチ
C-5トレンチ
道路を示す表示
調査区全体図
各区画の面積実績
区画① 87.023～87.060m
区画② 87.035～87.108m
区画③ 87.018～87.081m
区画④ 87.024～87.138m
区画⑤ 87.042～87.127m
区画⑥ 87.129～87.152m

第５図　調査区全体図

Ⅴ　検出された遺構と遺物

１．遺跡の概要

本遺跡では、As-B 一次堆積層であるⅤ層下面にて調査を行い、水田跡と As-B 降下以降の溝２条（ＳＤ－１・ＳＤ－２）とピット１基（Ｐ－１）を検出した。本遺跡で検出された水田跡は、As-B 一次堆積層で埋没した平安時代の水田跡（以下 As-B 下水田跡と呼称）と、As-B 降下以降の水田跡（以下 As-B 混土下水田跡と呼称）に分けられる。As-B 下水田を被覆する As-B 一次堆積層は、２㎝～ 10㎝程の厚さで残存しているが、場所によっては堆積がみられず、後世の耕作によりⅥ層の水田耕作土壌まで撹拌が及んでいる。また、本遺跡で検出された畦は、頂部付近で As-B 一次堆積層がみられないものが多い。今回の調査では、後世の耕作痕がみられる範囲の一部を As-B 混土水田跡と捉えた。なお、断ち割り調査の結果、平安時代より古い水田跡は明確には認められなかった。遺物は、As-B 下水田及び As-B 混土水田面上や As-B を覆土とする遺構で奈良・平安時代の土師器・須恵器片が少量出土している。

２．水田跡

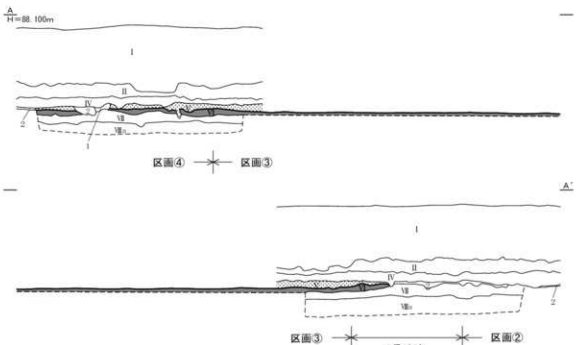
As-B 下水田跡（第５・６・７図）

残存状態：場所によって As-B 一次堆積層の残存状態が異なっており、区画①、区画③、区画⑤、区画⑥及び区画④の一部が As-B 下水田跡の範囲となる。**地形**：調査区北西から南東へ向かって緩やかに低くなっている。田面の標高は、最高位が区画⑥の 87.152m、最低位は区画③の 87.018m である。**区画**：６区画が確認されたが、全容が把握できるものはない。各区画の標高は概ね地形の傾斜に沿った値を示す。ただし、後世の耕作痕がみられる区画②・区画④では、隣接する区画①・区画③と比べて２㎝～４㎝程全体的に標高が高くなっている。これに対して、相対的に標高が低い区画①・区画③では、As-B 一次堆積層とその下の水田面が比較的よく残存していた。**畦畔**：東西の畦を２条（１・４号畦畔）、南北の畦（２・３・５・６号畦畔）を４条確認した。このうち計測可能な畦畔の幅は２号畦畔が 79㎝～ 97㎝、３号畦畔が 76㎝～ 85㎝、４号畦畔が 56㎝～ 62㎝、６号畦畔が 53㎝～ 68㎝を測る。また、走行方向は、１号畦畔がＮ -72°- Ｅ、２号畦畔がＮ－７°－Ｅ、３号畦畔がＮ－４°－Ｗ、４号畦畔がＮ－ 86°－Ｗ、５号畦畔が推定でＮ－ 13°－Ｅ、６号畦畔がＮ－ 14°－Ｗである。水田面からの比高差は、１号畦畔が 2.1㎝～ 4.3㎝、２号畦畔が 1.0㎝～ 5.1㎝、３号畦畔が 0.5㎝～ 5.8㎝、４号畦畔が 0.6㎝～ 5.0㎝、５号畦畔が 0.6㎝～ 3.5㎝、６号畦畔が 0.2～ 4.3㎝を測る。これらの畦畔上では、耕作痕とみられる凹凸が多く検出されることから、削平を受けた畦の残存部分であると捉えられる。１号畦畔の北東部では、畦畔の推定範囲上で深さ３㎝～６㎝程のやや深い耕作痕がみられ、As-B 一次堆積を覆土とするものと、As-B 混土を覆土とするものが混在する状態であった。また、畦畔とは認められないものの、水田面の特徴が大きく異なる区画③と区画④の境を示すものと想定される痕跡として、Ｎ－ 63°－Ｅ方向の高まりを検出している。この高まりは、区画③に対する比高差が 1.8㎝～ 3.9㎝であるが、区画④水田面との比高差はほぼ認められない。**水口**：調査範囲においては確認されなかった。**水田面の状態**：本遺跡では、畦畔や高まりによる区画ごとに水田面の状況が異なっており、それぞれ As-B 下水田跡、As-B 混土下水田跡の範囲となるとみられる。As-B 下水田跡は、区画①で最も残存状態が良く、水田面とそれを被覆する As-B 一次堆積層に鉄分の沈着が顕著であった。区画③では、As-B 一次堆積層下で凹凸の少ない平坦面が検出された。また、一次堆積層や水田面における鉄分の沈着もあまりみられないことから、区画①とは水田耕作の状況が異なっていた可能性が高い。そのほか、区画⑤・区画⑥も基本的

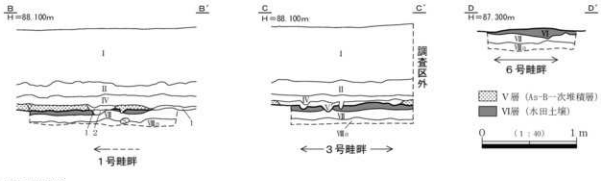
には As-B 下水田跡であると考えられる。ただし、区画⑤では一次堆積層の残存が明瞭でなく、一次堆積の撹拌層と混在している状態である。また、３号畦畔や４号畦畔の頂部付近では As-B 混土が水田面を撹拌する状況が認められる。したがって、As-B 降下後に耕作が行われていた可能性がある。**遺物**：水田面直上から、器種不明の土師器小片がわずかに出土した。**時期**：平安時代末に帰属すると考えられる。

As-B 混土下水田跡（第５・６・７図）

残存状態：後世の耕作痕がみられる区画②及び区画④の一部が As-B 混土下水田跡の範囲と想定される。この範囲では、凹凸が多く検出され、水田面及びそれを被覆する As-B 混土（第６図２層、第７図１層）に鉄分の沈着が顕著であることから、As-B 降下後の水田跡と判断した。また、耕作に伴って As-B 一次堆積層（Ⅴ層）や黒褐色土の水田土壌（Ⅵ層）が削平されたとみられ、凹凸の著しい部分は、Ⅵ層下の褐灰色粘質土（Ⅶ層）上面が検出面となっている。**畦畔**：調査範囲においては確認されなかった。**水口**：調査範囲においては確認されなかった。**水田面の状態**：区画②では、水田面の大部分が As-B 混土によって覆われていた。基本的にⅦ層上面が水田の検出面となっており、As-B 降下以降の耕作痕とみられる凹凸が顕著である。さらに区画④でも、As-B の一次堆積層が確認できない部分が存在し、As-B 混土下水田跡となる可能性が高い。範囲を明確に捉えるには至らなかったが、少なくとも区画内の東側半分が As-B 混土で覆われており、As-B 降下以降の耕作痕とみられる凹凸が顕著である。また水田の検出面は、水田土壌であるⅥ層とその下のⅦ層が混在している状態であった。**遺物**：水田面直上から、器種不明の土師器小片がわずかに出土した。**時期**：As-B 降下以降に帰属すると考えられる。



第６図　As-B 下水田跡・As-B 混土下水田跡　断面図・エレベーション図



1号畦畔土層説明

1．灰黄褐色土（10YR6/2）　As-Bφ0.2～0.5cm多量、にぶい黄橙色土粘質土ブロックφ0.5～1.0cm少量含む。鉄分の沈着あり。しまりやや弱。粘性ややあり。As-B降下後の攪拌層。

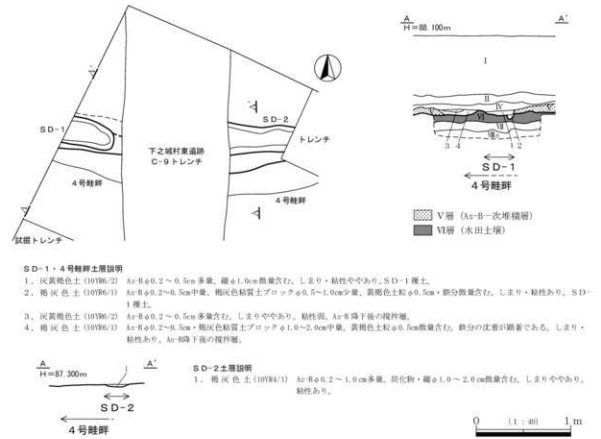
2．褐灰色土（10YR5/1）　As-Bφ0.2～0.5cm多量、褐灰色粘質土ブロックφ0.5cm微量含む。しまりやや弱。粘性あり。As-B降下後の攪拌層。

第７図　As-B下水田跡・As-B混土下水田跡　断面図

３．溝跡

ＳＤ－１（第８図／ＰＬ．３）

位置：Ｘ＝34305～34310、Ｙ＝－71515～－71510。**主軸方位**：Ｎ－74°－Ｗ。**重複**：４号畦畔と重複する。土層断面と出土遺物の観察から、本溝が新しい。**規模**：上端幅0.25ｍ～0.30ｍ、下端幅0.13ｍ～0.21ｍ。**残存深度**：10cm。**断面形態**：不整形状を呈する。**底面の状態**：耕作痕とみられる凹凸が顕著である。**遺構埋没状態**：As-Bを含み、Ⅳ層に近い褐灰色土で埋没している。本溝及びＳＤ－２は、覆土や形



第８図　ＳＤ－１・ＳＤ－２　平面図・断面図

態の特徴が類似するため、同一の性格を有すると考えられる。４号畦畔の北側に並走し、これを切る形で検出されていることから、As-B 降下後の畝立て痕跡である可能性がある。**遺物**：遺物は出土していない。**時期**：As-B 降下以降に帰属すると考えられる。

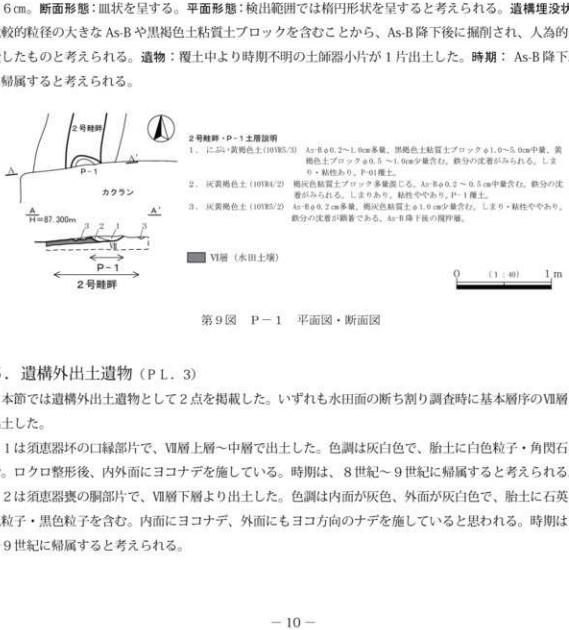
ＳＤ－２（第８図／Ｐ Ｌ．３）

位置：Ｘ＝34305～34310、Ｙ＝－71510～－71505。**主軸方位**：Ｎ－88°－Ｅ。**重複**：４号畦畔と重複する。土層断面と出土遺物の観察から、本溝が新しい。**規模**：上端幅 0.26 m～ 0.33 m、下端幅 0.14 m～ 0.21 m。**残存深度**：確認面から３cm。**断面形態**：皿状を呈する。**底面の状態**：凹凸はなく、なだらかである。**遺構埋没状態**：As-B を含み、Ⅳ層に近い褐灰色土で埋没している。**遺物**：覆土中より時期不明の土師器小片が１片出土した。**時期**： As-B 降下以降に帰属すると考えられる。

４．ピット

Ｐ－１（第９図／Ｐ Ｌ．３）

位置：Ｘ＝34295～34300、Ｙ＝－71595～－71585。**重複**：２号畦畔と重複し、畦の中央を切る形で検出された。土層断面の観察から、２号畦畔より新しい。**規模**：(0.32) m× (0.11)m。**残存深度**：確認面から６cm。**断面形態**：皿状を呈する。**平面形態**：検出範囲では楕円形状を呈すると考えられる。**遺構埋没状態**：比較的粒径の大きな As-B や黒褐色土粘質土ブロックを含むことから、As-B 降下後に掘削され、人為的に埋没したものと考えられる。**遺物**：覆土中より時期不明の土師器小片が１片出土した。**時期**： As-B 降下以降に帰属すると考えられる。



第９図　Ｐ－１　平面図・断面図

５．遺構外出土遺物（Ｐ Ｌ．３）

本節では遺構外出土遺物として２点を掲載した。いずれも水田面の断ち割り調査時に基本層序のⅦ層より出土した。

１は須恵器坏の口縁部片で、Ⅶ層上層～中層で出土した。色調は灰白色で、胎土に白色粒子・角閃石を含む。ロクロ整形後、内外面にヨコナデを施している。時期は、８世紀～９世紀に帰属すると考えられる。

２は須恵器甕の胴部片で、Ⅶ層下層より出土した。色調は内面が灰色、外面が灰白色で、胎土に石英・白色粒子・黒色粒子を含む。内面にヨコナデ、外面にもヨコ方向のナデを施していると思われる。時期は、８～９世紀に帰属すると考えられる。

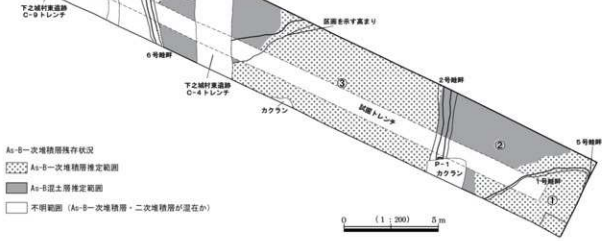
Ⅵ　まとめ

本遺跡では調査の結果、As-B 降下以前の水田跡及び As-B 降下以降の水田跡、溝２条、ピット１基が検出された。以下、周辺遺跡の状況を概観しつつ、本遺跡の位置づけを検討したい。

１．As-B 下水田跡について

本遺跡では、As-B 一次堆積層の残存状況が一様でなく、堆積状況によって As-B 下水田跡及び As-B 混土下水田跡に分けられる。このうち、As-B 下水田跡であると明確に言えるのは区画①・③・⑥であり、区画④西側や区画⑤もその可能性が高いものと考える。区画①・⑥は水田跡を被覆する As-B 一次堆積層の残存が良好であり、検出面に鉄分の沈着とわずかな起伏がみられた。これに対して区画⑤や区画④西側では、As-B 一次堆積層と二次堆積層が混在する状況であり、それぞれの範囲や検出面の違いを明確に捉えるには至らなかった。また区画③は、As-B 一次堆積層の残存が良好ではあるが、検出面における鉄分の沈着があまりみられず、凹凸の少ない平坦面となっている点が区画①・⑥と異なる特徴として挙げられる。この違いは、As-B 降下時の耕作状況を示すものとして捉えられる可能性がある[1]。

また本遺跡では、As-B 下水田跡の畦畔として、東西の畦２条と南北の畦４条を確認した。畦畔の走行軸は、条里制地割の軸よりやや逸れるものが多く、これにより示される区画も、北西から南東に傾斜する地形の影響を受けたと考えられる。本遺跡の近辺では、下之城村東遺跡、下之城村東遺跡Ⅱ、宮原町遺跡、宮原町遺跡２などで条里制地割の坪境を示す大畦畔が検出されており、本遺跡も広くは条里制地割に則った水田跡であった考えられる。ただし、坪内の小区画に関しては、下之城村前遺跡７で棚田状の区画が確認されたほか、上中居荒神Ⅰ遺跡や矢中村北Ａ・天王前遺跡で、地形に沿った畦畔や区画が報告されている。したがって、大畦畔によって区切られた坪内の小区画は、必ずしも条里制地割の軸を示すとは言えず、地形に制約された状況であったことが想定され、本遺跡もこうした状況のなかで捉えられる。



第 10 図　As-B 一次堆積層残存状況推定図

２．As-B 降下以降の耕作痕跡について

As-B 降下以降の遺構として、As-B 混土下水田跡及び溝２条、ピット１基が検出されている。これに関して、本遺跡で検出された As-B 混土層は、以下の３通りに分類され、それぞれ水田もしくは畠などの耕作に伴う可能性がある。

１．As-B 混土下水田跡覆土（第６図２層、第７図１層）

水田跡を被覆する As-B 混土層である。Ⅵ層もしくはⅦ層由来と考えられる粘質土ブロックを多く含み、As-B と混じりきっていない状態であった。

２．As-B 二次堆積層（基本層序Ⅴ′層、第８図３・４層）

区画⑤及び３号畦畔上で検出され、層序はⅣ層の下にあたる。攪拌の度合いは最も小さい。土層断面からは部分的に水田面を攪拌した痕跡が認められ、攪拌部分の中層～下層などで粘質土ブロックが少量みられた。そのほか、各畦畔の断ち割り調査でみられた部分的な攪拌もこれに含まれる。

３．基本層序Ⅳ層

粘質土ブロックは含まれないことから、As-B の攪拌がすすんだ土層であると言える。土層断面からは、As-B 一次堆積層や水田面を一部鋤き込む様子が確認され、ＳＤ－１やＳＤ－２の覆土ともきわめて近い。

これらの As-B 混土層は、攪拌の状態や層位の関係から、１・２と３の間に時間幅が想定される。したがって、本遺跡では As-B 降下以降少なくとも２時期にわたる耕作痕跡が検出されたと言える。このうち古いものは As-B 混土下水田跡であり、区画②及び区画④東側がこれにあたる。本遺跡では、水田跡に伴う畦畔や区画の検出には至らなかったが、As-B 混土層下で耕作土の可能性がある粘質土（Ⅶ層）を検出し、検出面における凹凸や鉄分の沈着が著しいことから、これを水田耕作の痕跡であると捉えた。As-B 降下以降と思われる耕作痕は、水田の検出面だけでなく、１・２号畦畔上でも確認されている。また、２の As-B 二次堆積層や２号畦畔上のＰ－１は、土層の状況から As-B 混土下水田跡に前後する時期が考えられる。これに対して、新しいものはＳＤ－１・ＳＤ－２やⅣ層の時期であり、溝→Ⅳ層の新旧関係が認められる。ＳＤ－１・ＳＤ－２はともに４号畦畔に並走し、これを切ることから、As-B 降下後の耕作痕跡となる可能性がある[2]。

As-B 降下以降の水田跡や耕作痕跡に関しては、前橋市の勝島川端遺跡・公田東遺跡・公田池尻遺跡、中内村前遺跡、高崎市の中尾村前Ⅴ遺跡、中尾村前Ⅵ遺跡などで調査されている。これらの遺跡では As-B 一次堆積層を鋤き込む半円状もしくは三角形状の鋤痕が水田面で広く確認されており、その一部は As-B 降下後の復旧痕跡であると捉えられている（石守 2004、藤巻 1997）。また、勝島川端遺跡・公田東遺跡・公田池尻遺跡では耕作に関わる As-B 混土層が上層・中層・下層の３層検出されている。このうち、As-B 軽石と灰褐色土がブロック状に混じるという下層の状況は本遺跡の As-B 二次堆積層と、災害復旧後の耕作土とされる中層の状況は本遺跡のⅣ層と類似している。したがって、本遺跡で検出された As-B 二次堆積層は、As-B 降灰後からの時期は不明であるものの、水田や畠など、耕作が再開された際の痕跡である可能性がある。さらに、本遺跡の調査区全体で安定してみられるⅣ層は、こうした耕作がある程度繰り返された後の土層であると考えられる。

As-B 降下以降の水田跡や耕作痕跡は、本遺跡の周辺でも確認されている[3]。下中居条里遺跡では、耕作痕を伴う浅い溝や、中世の水路跡が検出されており、自然科学分析から、攪拌を受けた As-B 二次堆積層下の灰黄褐色粘質土中で水田耕作が行われていた可能性が高いことが報告されている。また、下中居条里遺跡Ⅱでも自然科学分析の結果、As-B 攪拌層下の水田跡とこれに伴う水路跡が確認されている。宮原町遺跡２では、

As-B 下水田跡の全体で耕作痕が検出され、その一部で As-B 一次堆積層を鋤き込んだとみられる土層が確認されている。倉賀野条里Ⅵ遺跡では、攪拌を受けた As-B 軽石層下面より小ピット群や鋤痕が検出されており、自然科学分析により稲作が行われていた可能性が高いことが判明している。

以上に挙げた遺跡は本遺跡から 1 ㎞以内に位置するものである。したがって、As-B 降灰後からの時間幅は不明であるが、本遺跡周辺では耕地の復興が行われ、水田もしくは畠などの耕作が再開されたとみられる。ただし、本遺跡で As-B 降灰後 2 時期にわたる耕作痕跡が検出された点や、周辺遺跡の検出状況が各々異なる点を踏まえると、水田跡として再耕作された規模や期間を一様に捉えることは難しい。よって、As-B 降下以降の水田耕作状況を把握するには、水田耕作土の上面を検出面とする As-B 下水田跡とは検出状況が異なる点に留意し、自然科学分析を用いた上で多角的な視点で調査方法を再検討する必要があろう。この点で言えば、本遺跡の調査も課題を残す結果となったが、Ⅱ章でも述べた通り、本遺跡一帯は近年まで断続的に耕作が行われたことが明らかとなっており、本遺跡の調査もその歴史の一端を示す成果を得られたと言える。

註

1　下之城仲神遺跡 4 では、水田面の色味や硬度、水田土壌断面の状況、プラント・オパールの検出密度などから、As-B 降下時の水田耕作状況が論じられている（清水 2014）。また、岩押Ⅲ遺跡では、As-B 下水田跡で異なる水田面の状況から耕作期間に関する考察がなされている（坂口 2011）。

2　これは、畠の畝立て痕跡もしくは、水田で畦をつくる際の掘削痕跡であると考えられる。後者の類例としては、高崎市の柴崎・隼人遺跡 3 や、富岡市の七日市六反田遺跡Ⅱが挙げられる。七日市六反田遺跡Ⅱでは、幅 15㎝～ 30㎝、深さ 4 ㎝～ 6 ㎝を測る溝状の掘削痕が畦畔に沿う形で検出され、畦を盛るために掘削した痕跡であると推定されている（浅間 2008）。

3　このほか、本遺跡と調査範囲が一部重複する下之城村東遺跡では、As-B 一次堆積層の残存状況が悪く、小畦畔がほとんど確認されていないことが報告されている。ただし、所々で As-B 一次堆積層に近い堆積をする As-B 混土層が基本層序として示されていることから、本遺跡と同様の耕作状況であった可能性がある。また、坪境と想定されるラインで As-B 降下以降に帰属する 4 本以上の溝が検出された点は、As-B 降下後の土地利用状況を示すものとして注目される。

主要な引用・参考文献

浅間　陽　2008 「道構と遺物」『七日市六反田遺跡Ⅱ』富岡市七日市六反田遺跡調査会
池田　敬　1999 『倉賀野続橋遺跡（倉賀野条里遺跡Ⅵ）』高崎市教育委員会
石守　晃　2004 「平安未期の火山災害復旧事例－中内村前遺跡を中心として－」『1108 －浅間山噴火－中世への胎動』第 12 回特別展展示解説図録　かみつけの里博物館
大野義人　2013 『下之城村前遺跡 7 』高崎市教育委員会
荻野博巳・須永薫子・板垣　宏・山口慶太　2016 『宮原町遺跡』高崎市教育委員会
金子正人　1997 『上中居常神 1 遺跡』高崎市遺跡調査会
群馬県史編さん委員会（編）　1990 『群馬県史』通史編 1 原始古代 1
坂口　一　2011 『岩押Ⅲ遺跡』 財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
志田　登・鷺谷亨信　1996 『下中居条里遺跡』高崎市教育委員会
清水　豊（編）　2004 『1108 －浅間山噴火－中世への胎動』かみつけの里博物館第 12 回特別展展示解説図録　かみつけの里博物館
清水　豊　2014 『下之城仲神遺跡 4 』高崎市教育委員会
下之城村東遺跡調査会　1983 『下之城村東遺跡』
下之城村東遺跡調査会　1984 『下之城村東遺跡（Ⅱ）』
瀧澤典雄・山口慶太　2016 『宮原町遺跡 2 』高崎市教育委員会
田口一郎・石丸淳史　2012 『柴崎・隼人遺跡 3 』高崎市教育委員会
田村　孝　2003 「発掘された水田」『新編高崎市史』通史編 1 原始古代
高崎市市史編さん委員会（編）　2000 『新編高崎市史』資料編 2 原始古代Ⅱ
高崎市市史編さん委員会（編）　2000 『新編高崎市史』通史編 2 中世
高崎市市史編さん委員会（編）　2003 『新編高崎市史』通史編 1 原始古代
永井智教　2015 『倉賀野中里前遺跡 2 』高崎市教育委員会
長井正欣・志田　登　1996 『中尾村前Ⅴ遺跡』高崎市遺跡調査会
長井正欣・神戸聖語・大越直樹　1997 『中尾村前Ⅵ遺跡』高崎市遺跡調査会
日沖晰史　2016 「江木南土井遺跡」高崎市教育委員会
藤巻幸男　1997 「永田」『櫛島川端遺跡・公田東遺跡・公田池尻遺跡《本文編》』財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
宮寺　久・桜井　衛・白井　修・斎藤圭子　1983 『矢中遺跡群（Ⅲ）村北Ａ・天王前遺跡』高崎市教育委員会
矢島　浩・常深　尚　2017 『下中居天神裏遺跡 3 』高崎市教育委員会
山田誠司・松村春樹　2019 『宮原町遺跡 3 』高崎市教育委員会
吉田昌利　1998 『下中居条里遺跡Ⅱ』高崎市教育委員会

報告書抄録

フリガナ	ヤナカノグリイセキ
書名	矢中野栗遺跡
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第447集
編著者名	矢島浩　井上太　春里桃子
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所 〒379-2146　群馬県前橋市公田町1002番地1　　TEL.027-265-1804
発行機関	有限会社 毛野考古学研究所
発行年月日	令和2年6月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡	(世界測地系)				
やなかのぐりいせき 矢中野栗遺跡	ぐんまけんたかさきしや 群馬県高崎市矢 なかまちなのぐり 中町字野栗1282 ばんち　ぞくち 番地、1283番地	10202	784	36°　18′　23″	139°　02′　13″	20191223 ～ 20200118	172.51	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢中野栗遺跡	水田跡	平安時代末 As-B降下以降	水田跡　1面 水田跡　1面 溝　2条 ピット　1基	土師器 須恵器	

写　真　図　版

Ⅱ層　As-A 混土層

Ⅲ層　As-A 凝集層

Ⅳ層　As-B 混土層

Ⅴ層　As-B ー次堆積層

Ⅵ層　黒褐色粘質土（永田土壌）

Ⅶ層　褐灰色粘質土

基本層序A土層断面近景（北東から）

調査区遠景（東から）

調査区全景（南東から）

調査区全景（北西から）

区画①・区画②検出状況（北東から）

区画③検出状況（北東から）

区画③・区画④東側検出状況（北西から）

区画⑤・区画⑥検出状況（北から）

１号畦畔・５号畦畔全景（南西から）

２号畦畔全景（南から）

３号畦畔・４号畦畔全景（東から）

３号畦畔全景（北から）

６号畦畔全景（北西から）

３号畦畔断ち割り土層断面近景（北東から）

ＳＤ－１・ＳＤ－２全景（東から）

Ｐ－１全景（南から）

遺構外出土遺物

１（S=1/1）

２（S=1/2）

高崎市文化財調査報告書第447集

矢中野栗遺跡

－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査－

令和２年６月●日印刷
令和２年６月30日発行

編　集／有限会社毛野考古学研究所
発　行／有限会社毛野考古学研究所
印　刷／朝日印刷工業株式会社